

令和4年度日本体操学会公募研究プロジェクト報告書

研究題目：日本におけるデンマーク体操の普及と変遷について

研究者氏名(所属)：○早野曜子(自由学園) 三橋綾子(玉川大学) 有川愛弓(神村学園)
松浦早希(神戸市立葺合中学校) 山田恵子(自由学園)

キーワード：デンマーク体操 伝承 身体文化 間身体性

I. 研究目的

本研究は日本でデンマーク体操がどのように伝承されて来たかについて現在「デンマーク体操」を実施している3校の取り組みから、デンマーク体操の特異性を明らかにし、教育的意義を新たな視点で探求することを目的とする。

II. 方法

現在授業で実践している玉川大学、自由学園、神村学園の教師と児童・生徒・学生、および地域でデンマーク体操を教える指導者を対象に質問紙とGoogleフォームによるアンケート調査を2022年9月-10月に実施した。

対象：指導者15名、神村学園(小学4-6年、中学・高校) 玉川大学1年、自由学園(小学4-6年、中学・高校・大学部)の小学生138名、中学生377名、高校生582名、大学生196名、合計1,234名から回答を得た。ユーザーローカル テキストマイニングツールを用い、自由記述の出現語頻度・傾向を分析した。回答者の体操経験は1年目422(15.9%) 2年目317(25.7%) 3年目以上452(36.6%)であった。

III. 結果と考察

体操で伝えたいことについて教師は「自分の体を知り向き合うこと」「仲間とのコミュニケーション」「楽しさ」を挙げ、社会体育指導者は「柔軟性・バランス感覚」など体操の具体的な内容が示された。体操実践者の「デンマーク体操を通して得られたもの」では、「仲間との一体感」57%「人と合わせる協調性」57%「意識と動きを連動させる能力」48%などの他に「仲間との協力」「音楽に合わせて動く楽しさ」「新しい体の使い方」「羞恥心を捨てる」等記述があった。デンマーク体操の特徴について「リズムカルな動き」93%「競争ではなく、協力して作り出す動き」92%「みんなでリズムや動きを揃えて動く楽しさ」90%「体操している人と観ている人が共に楽しめる」84%の他「柔軟な動き、表現」「正解がない、気持ちの表現」等取り組み方で異なる特徴が出た。

「あなたにとってデンマーク体操とは？」の自由記述では3校に共通する出現単語としては「楽しい・表現・仲間・美・リズム・教える」などが抽出された。玉川学園、自由学園共に1931年よりデンマーク体操を行なっている。玉川学園は幼稚園生から教職課程をとる学生が、体育祭での演技をはじめ、体育の授業や朝の体操など日々の教育活動で実践している。またデンマーク体操部(小6から大学4年)においても伝統が継承されている。体操の特徴として「伝統・協調」等が頻出単語で抽出された。神村学園は、幼稚園年中から高校まで発達段階に合わせ神村学園独自のデンマーク体操を用いた体づくり運動を取り入れている。「憧れ・一体感・集団意識」等が頻出単語として抽出された。自由学園は毎年4歳から22歳まで体操発表を行い、2学期にはデンマーク人指導者の授業を体験している。「デンマーク体操とは」では、「気持ち良い」など出現傾向が見られた。

IV. 結論

デンマーク体操は各学校で独自の身体文化として伝承され、その特異性は表現・仲間・リズム・美を育む身体知である。新たな教育的意義として「自己と他者が協働し表現する」過程において感得される間身体性が示唆される。

V. 今後の課題

上記の実践で培われる「身体知」という視点には身体向上という教育効果とは別の教育的意義を獲得する可能性があるのではないかと。それはたとえば身体を起点として他者とかかわる意識体験を得ることの可能性である。この意味での身体知はデンマーク体操の経験からどのように理論化できるのか。

メルロ＝ポンティは自己の身体知覚と他者の身体知覚が同じ世界の内に認識される現象を「間身体性」として考察した。身体現象学の視点からデンマーク体操を捉え、身体で感得される自己・他者との身体経験の教育的意義を解明していくことが課題である。